ぼいす

北区飛鳥山博物館だより
2007.3.20
18

春期企画展

縄文人の祈り 観覧無料

―東谷戸遺跡の土偶―

会期：平成19年3月20日～5月6日　午前10時～午後5時
※休館日　4月30日を除く月曜日・3月22日・5月1日
会場：特別展示室

人体のように粘土で造形した焼き物を土偶と呼ぶ。その表現の特徴から女性の姿であるといわれている。しかし、中には人間離れした顔や体が…。それは母なのか。それともカミなのか。東谷戸遺跡の土偶を手がかりに、縄文人の気持ちを垣間見ます。

大きく手を広げ、脚は台地をふんばるように開き、スリムな体には胸の表現が。顔は奇妙にも丸い頭部の前面に突き出た平坦な作り。この土偶は何を語るのだろうか。

縄文人の祈り ― 東谷戸遺跡の土偶 ―

今から16年前の1991年、試掘調査によって新たに遺跡が発見されました。場所は西ヶ原一丁目41番地。かつての付近の字から、その遺跡は東谷戸遺跡と名付けられました。せまい調査範囲ながらも縄文時代の竪穴住居址や土坑が発見され、大きな成果が得られました。中でも特筆されるのが土偶の出土です。土坑の中から11の破片の状態で出土した土偶は、つなぎ合わせるとほぼ完全な形に復原できました。大きく手を広げ、足は大地を踏ん張るように開き、スリムな体には胸の表現が。顔は奇妙にも丸い頭部の前面に突き出た平坦な作り。とても特徴的な土偶です。

土偶といっても全てが同じ姿形をしているのではありません。時には顔の輪郭がハート形をしていたり、あるものは豊かな乳房と大きなお腹を表現したり、そしてよく知られている“遮光器”とよばれるサングラスをかけたような顔立ちをしたものまで、地域や時期によって様々です。

今回の展示は、独特な姿の東谷戸遺跡出土の土偶が、縄文時代のいつごろのもので、どんな土偶のグループに属するのかを位置づけます。また、土偶は土器や石器といった生活用具ではなく、縄文人の精神につながる道具と考えられています。では、何に使われたのか。縄文人が土偶にこめた気持ちとはどんなものだったのか。そんな土偶の謎を探る展示です。

出土した土器（東谷戸遺跡）

もう一つの土偶（東谷戸遺跡）

ぼいす ―モノから心を伝える―

近年、巷に「博物館」「ミュージアム」を名乗る娯楽施設が増えて、「いろいろなものが並んでいれば博物館」という誤った認識が広まっているように感じるが、言うまでもなく、本来博物館の存在基盤となるのは所蔵資料であり、資料を軸とした調査研究や教育普及などの諸活動が機能していなければ博物館とはいえない。

子ども対象の展示でも寄贈資料を活用

博物館の所蔵資料は、すでに所有するコレクションをベースにしている場合もあれば、拾得、購入、寄贈など積極的な収集活動が必要な場合もある。当館のような地域博物館はもちろん後者であり、移り変わる地域の歴史文化を伝えるために現代資料も視野に入れながら資料を集めている。

なかでも生活用具類の収集はもっぱら寄贈という手段に頼らざるを得ないため、当館でも日頃から区民の方々に資料寄贈について働きかけている。というのも、世代ごとにライフスタイルの違いが著しい現代では、一世代以上前のモノは建替えなどの際にあっけなく処分されてしまうからである。都会の住宅事情を考えれば仕方のないことだが、モノには家と土地の香りが長い年月をかけて沁みこんでいる。近年、意識的に博物館に寄贈してくださる方々は、その香りが失われしまうことを憂い、自分たちが受け継いできた暮らしの文化を伝えてほしいと博物館に思い出の品々を託してくださる。イエ制度が消滅しつつある現代だからこそ、地域博物館にはモノと、そのモノに託された心を次世代に手渡しする役割が期待されていると強く感じている。（企）

大地・水・人

眺めのいい記憶のなかに

石倉　孝祐（当館学芸員）

わたくしが毎日、博物館に通うために降りる駅はJR線王子駅である。ホームの前には春の気配が感じられる飛鳥山公園が、長い緑の連なりになって視野にひろがっている。

見馴れた風景である。ホームから反対にボーリング場の入った商業ビルのある崖下を見ると、そこには賑わいのある広場があって、坂を上る小さな都電の姿も眼に入ってくる。しかし通路に過ぎない駅ホームに何時になくぼんやりと立ち、季節の移ろいを感じようとしても、ごく当たり前の景色には何の感慨も抱かない自分がいる。日常の風景の中に溶け込んだ猫背気味の中年男が立っているだけだ。

北区に生まれ育ったわけではないわたくしにとって、初めて王子の駅に降り立ったのはいつのことだったのだろう。思い出してみる。ずいぶんと昔のことになってしまった1983年の確か暑い夏だったと思うが、でもかすかな秋の訪れをビルの影に感じる夕方の鮮烈な記憶がその日であった。長く途絶えていた古い行事が町のひとたちの熱意によって再現されるという話を新聞の小さな記事に見つけ、はじめての王子行きとなったのであった。その行事のことはまた別に書く機会もあるかもしれないが、そう、その時、王子駅に下りた20代なかばの自分がいた。

だいたい23区の駅のなかで、改札を出ると目の前に「山」と「川」が同時にひろがるところは王子以外にあるだろうか。すこし感動した。なだらかな道を歩きつつ左にひろがる飛鳥山の黒々とした夏の緑を眺め、また右に渓澗を見下ろした楽しさは今も忘れられない。この地では音無川とも呼ばれる石神井川。その音無川の名前が遠く紀州熊野にゆかりあるものと、やがて知ったのち、王子の地を熊野に擬（なぞら）えた中世のひとびとの風景への見立てを思い、またいかに風景が変容をとげても、地名の持つ「アウラ」によってたちどころに地域の記憶は歴史のなかにひろがることに深く感銘したものであった。考えてみれば「王子」という、いかなる人物にも連想がひろがる地名は、風土のなかで形づくられた歴史に連なり、「記号＝象徴」喚起の働きのなかで「ひとつの記憶＝熊野への想い」に結ばれるのである。いまそこにある名所として見立てられた景観こそは、ひとびとのさまざまな記憶の風景のなかに、そして日本の記憶の重層のなかにひろがっている。フランスの地理学者オギュスタン・ベルクが現代の音無親水公園を見て、かつての江戸の風景がn／1に見事に縮景される妙について感嘆していたが別に驚くこともない。修景もまたひとつの記憶の喚起装置である。こんなことを王子駅のホームで思い出したら、見慣れた風景が過去につながりはじめ、初めて見たかのように鮮明な画像を結び、やがて眺めの風景のなかに立ち尽くす自分がいることに驚いた。

たまにはすこしだけ背中をそらしてみるのもよいかも知れない。

王子駅周辺の石神井川

人気講座のコースを歩いてみよう!

当館では毎年30種類前後、60回程度の講座や講演会などをおこなっていますが、なかでも当館の事業の特色ともいえるのが野外講座の多さです。「遺跡探訪」「鎌倉探訪」「はじめての北区めぐり」などなど、参加者の方々とともに「あるく・みる・きく」を実践してきました。

野外講座の欠点をあえて挙げれば、どの講座も定員を30名前後に抑えなければならないこと。安全に楽しく歩くためですが、講座の締切日には毎回たくさんの方々に涙を呑んでいただいています。

そこで、今回は平成18年度の野外講座で人気の高かった2講座をチョイスして、コースのポイントや見所をご紹介します。これからの季節、春風に吹かれながら、ぜひご自身の足で歩いて「見て」ください！　※おきがる度 ★ー気軽にどうぞ！ ★★ー歩きがい有り！ ★★★ー気合を入れて！

コース１　おきがる度 ★

新緑の日光御成道をたどり歴史を探る

（平成18年4月29日実施）

日光御成道は徳川家康の霊廟である日光東照宮への社参の道として整備された街道です。その道筋は、江戸城の神田橋御門から本郷追分までは旧中山道と同じ道筋をたどり、そこから現在の本郷通りへ入り岩淵宿・川口宿・鳩ヶ谷宿・大門宿・岩槻宿を経て、幸手宿で日光街道に合流。古河宿・宇都宮宿・今市宿を経由し日光へいたります。

この講座では日光御成道の北区内のルートをたどりました。西ヶ原ー里塚から飛鳥山に沿って低地に降りた後、王子神社森下を通り、王子稲荷脇の王子大坂を登っていきます。十条からは現在の岩槻街道を通り、稲付ー里塚を過ぎて赤羽の宝幢院を右折すれば、かつての岩淵宿と荒川は目の前。そして道筋は荒川を渡って対岸の川口宿へと続きます。講座では荒川河川敷をゴールに予定しましたが、当日は雨のため手前の正光寺門前で解散としました。約2時間の行程ですが、身近なエリアで歴史ある道筋が堪能できました。

①西ヶ原一里塚
都内で現存するのはここだけ！

②三本木橋(三本杉橋)
上郷用水がかかっていた石橋の親柱が交差点に残っている。

③王子大坂
かつての街道の雰囲気がただよっているような…。

④十条冨士塚
塚の頂上には石祠。6/30・7/1の山開きには付近に縁日が並ぶ。

⑤西音寺
崖線にあるので、昔はすばらしい眺望だったとか。

⑥稲付一里塚付近
残念ながら今は何も残っていないが、西ヶ原から一里目。

⑦宝幢院
門前の道標には「東川口善光寺道 日光岩付道」などの文字が。

コース２　おきがる度 ★★★

あるけおろじー

毎年、「葛飾区郷土と天文の博物館」さんと合同で企画している「あるけおろじー」。今回は葛飾区・北区を結ぶ道を西へたどるために、その終点と思われる「武蔵国分寺・府中」周辺を踏査しました。

朝9時30分に西国分寺駅を出発し、武蔵国分僧寺・尼寺、武蔵国府跡などをめぐる、総長７ｋｍ以上のコースをタ方までかけて歩き通しました。

７世紀後半から８世紀にかけて武蔵国府・国分寺が造営されたこの地域は、今なお古代の息吹を感じ取ることができる歴史ある街。千年以上昔の道と今の道が変わらぬルートをたどっていることには、参加者一同感動。

歴史散歩を満喫した一日でした。

①東山道武蔵道跡
現在は黄色の舗装で昔の道幅を示している。

②縄文時代の敷石住居
屋外展示を発見。
ちょっと得した気分

③伝鎌倉道
切通しで風情がある。
北条政子も走った!?

④国分尼寺金堂跡
基壇の版築の断面を観察できるようになっている。

⑤国分僧寺金堂跡
今も当時の礎石が残る。
妙にすわり心地が良い。

⑥国分寺塔跡
基壇跡がわずかに高い。
大イチョウが見事。

⑦現国分寺
今は背後の台地上にある。
境内に小さな資料室あり。

⑧国分寺南大門跡
植え込みで門と塀を表現。
復元活用、工夫してます。

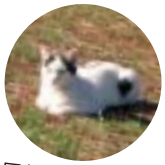
⑬推定「多磨寺」塔跡
塔の心礎が墓の礎石に転用されている。

⑫大国魂神社本殿
この神社の境内で国府関連遺構が見つかった。

⑪大国魂神社参道
旗を先頭に堂々と進む。

⑩けやき並木
幹の太さが圧巻でした。

⑨府中刑務所北側
あの「三億円事件」現場。


国分寺跡の芝生は
キモチいいにゃん！

資料紹介

クハズハマグリの話

本誌2号に続き、尾張出身の本草学者・伊藤圭介（当時文部省文書局編書課勤務）が明治6年（1873）に著した『日本産物志』武蔵部上巻から、最初の図版に掲載されている資料を紹介します。

解説文には「カヒセキ　介化石　王子瀧川産此地蛤蜆蠣等ノ化石間ニ出ツ」とあり、画家・服部雪齋によって上記3種類の貝が描かれています。かつて滝野川の石神井川畔には更新世後期に形成された化石包含層が良く見られる露頭がありました。その昔この地一帯が海底だった頃の証です。さて、クハズハマグリとは聞き慣れない名前ですが、クハズという言葉は石の意味で用いられていたようです。正徳5年(1715)に出された考証随筆『広益俗説弁』には「不食貝（くはずがい）の説」として生きている貝が石になって食べられなくなるという説話が取り上げられています。そして各種典籍からの類似譚や朱子学の説が紹介され、「水中の物、変じて高くなり、柔（やはらか）なる物、変じて剛（こはく）なる、と。石魚・石蟹（かい）もこれならんか。かゝるたぐひあれば、右のくはず貝も、貝の石になりたるなるべし云々」と記されています。

この時代の知識人は『広益俗説弁』に慣れ親しんでいたので、あるいはこうした記述に倣（なら）ったのかもしれません。まだ地質学・古生物学が確立する以前の話です。日本における化石研究は東京大学にナウマンが招聘されて以降に始まり、件（くだん）の王子瀧川産の貝化石も明治13年(1880)の夏、同地を地質調査に訪れたブラウンスによって初めて仔細が明らかにされました。（守）

日本産物志　武蔵部　上巻

EVENT REPORT イベントレポート EVENT REPORT

秋期企画展「遠くと近くの熊野　中世熊野と北区展」を終えて

中世以来、熊野と北区との歴史的関係は地域にさまざまな痕跡を残しています。いつかは地域の原点のひとつ・熊野を対象にした展示をしてみたいと思っていましたが、このたび展観の機会を得ることができました。熊野がユネスコ世界遺産に認定され、一種のブームとなったなかで、いかに地域史として熊野展を位置づけるのか悩みましたが、資料所蔵者のご理解をいただき、ふだん目にすることのない資料をお借りすることができました。会期を10月21日から12月3日と定め「いやし・すがすがし」「つながり・むすび」「ひろがり・かかわり」「いざない・えとき」のテーマのもと、約100点の資料を列品しました。またホワイエには写真作家・楠本弘児氏の作品パネル32点を陳列し熊野世界への導入としたところ、幸いにもご来館者数9.547人を数えることができました。

さらに付帯事業として10月28日に北とぴあで「熊野へのいざない」を実施、お茶の水女子大の岩壁茂先生・和歌山大の海津一朗先生にご講演をいただき（参加者124名）、翌日には当館を会場に「中世の人の一生　熊野観心十界図の世界」を開き、明治大の林雅彦先生・三重県の瀧川和也先生・盛福寺村主尭春ご住職による口演は真近に絵解きを聞く貴重な体験となりました（参加者117人）。また11月11日、「岡美保子の音楽で語る熊野古道を歩いた　いにしえの人の心」を開催（参加者47人）、熊野詣での和歌を現代風にアレンジした楽しいコンサートとなりました。（孝）

写真に見るあの日あの時

十条のお風呂やさん

ちょっと恥ずかしそうに玄関先にたたずむ従業員と子どもたち。その隣には「十条浴場」と書かれた看板が下がっています。JR埼京線の十条駅から徒歩5分程度。場所は区内最大級の商店街として知られる十条銀座商店街から少しわき道に入ったところです。

昭和26年に刊行された『北区史』の中に、「区営浴場」としてこの写真が掲載されています。その内容を読むと、一日の入浴者数は何と平均約800人!

江戸時代初期、蒸し風呂式の公衆浴場が登場してからすっかり庶民の憩いの場となった銭湯。『北区史』が編纂された戦後のこの時期は、戦災復興の呼び声と共に銭湯を要求する人々の声も多く上がったそうです。

十条駅から伸びる十条銀座商店街は、明治43年に十条停車場が開設してから商店が立ち並び始め、戦後も商店街振興組合が都の復興対策資金援助を受けたために早くも賑わいを取り戻した商店街です。そのすぐ脇に建つ十条浴場は、商店街利用者と近隣の住民とでさぞ大賑わいであったでしょう。

「十條浴場」　昭和20年代半ば

昭和40年には区内で122軒にのぼった銭湯ですが、現在は44軒となりました。減少の要因としては、自家風呂の普及や経営者の高齢化などが影響しているようです。江戸時代からの伝統の番台、タイルに描かれたダイナミックなペンキ絵、そして人と人との情報交換・交流の場としての機能を持った、愛すべき銭湯が減少しているのは寂しがりやの私にとっては切ない心境です。

（綾）

博物館インフォメーション

●常設展示室に“古代人の宝物”お目見え?!

―常設展示室・部分リニューアルのお知らせ―

展示開始：平成 19 年 3 月 27 日（開館記念日）

この春、常設展示室の古墳時代のコーナーが一部生まれ変わります。これまでの「川辺のまつりごと」のコーナーを「古墳時代の祭祀」とし、新たな展示資料とともに再出発します。

追加されるのは平成 13 年に「田端不動坂遺跡」から出土した古墳時代の祭祀遺物。 4 世紀の集落の中にあったひとつのとある穴から青銅鏡や勾玉・管玉・ガラス小玉など、古代人が使っていた様々な装身具が出土しました。これらは穴の中に丁寧に埋められていたことから、何らかの祭祀にともなって地中におさめられた宝器とみられています。その数に総計はなんと 150 点以上。学界でも注目され、都指定有形文化財にも指定されました。

原始・古代の青銅鏡としては区内資料では唯一のものであり、また玉類もメノウ製・水晶製・ガラス製など色とりどりな色彩が楽しめるようにちょっとした工夫をしています。

ぜひ、北区古代の輝きを見に来てください!!

●訃報

平成18年11月5日、小林三郎名誉館長がご逝去されました。小林名誉館長には当館の開館準備から関わっていただき、平成10年の開館以来、名誉館長としてご指導・ご助言をいただいてまいりました。

ここに謹んで哀悼の意を表しますとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

●季節限定ミュージアム・バッジがマンスリーに!

季節限定で頒布している「コン吉」のミュージアム・バッジですが、季節ごとに新作を作っているうち、この3月で12ヶ月分が揃うことになりました!

この4月からは「季節限定」と言うよりは「月限定」。あなたのお気に入りのバッジを見つけてくださいね!

●北区の昔を伝えるモノや写真を探しています!

博物館では区内で使われていた生活用具や北区に関係する古い文書、また昔の街並みや人々の暮らしぶりがうかがえる写真などを探しています。「こんなもの」と処分してしまう前に、どうか一言お声かけください!

ご連絡は03-3916-1133、担当クボノまで。

立往生
ぬらりくらりと
ぬらりひょん

学芸員リレーエッセイ

博物館いろは歌留多

この「いろは歌留多」。6人の学芸員がもちまわりで「いろはにほへと…」の順で川柳を作り、それにそえて心境を語るのだが、今回は「ぬ」。ぬぬっ!「ぬ」ではじまる言葉って!?

しばらく考えて思い浮かんだ言葉は「ぬらりひょん」(涙)。そこで辞書で調べると「“ぬらりくらり”に同じ」とある。そこですぐとなりにある「ぬらりくらり」を調べてみると「漫然としている様(さま)」とある。「あ、自分だ…」、と思わずうなってしまった。

というのも、この飛鳥山博物館に勤務して4年が過ぎようとしているこの頃、これまでの博物館での自分のありようを考えて少し反省気味な気分になっていたからだ。当館は講座数も多く、かなり忙しい職場といえるが、そのめまぐるしい日々の中で博物館の活動について今ひとつはっきりとしたビジョンをもたずに過ごしてきてしまったのではないか、という思いが確実にある。

今、博物館業界はゆれに揺れている。現在は博物館が当たり前のようにあり、当たり前のように運営されているが、バブル崩壊後の社会の効率化の中で博物館の概念そのものがどのように変化していくのかが、予測しづらい状況にあるのが現状だ。こうした大問題を前にすると、ただ立ち尽くすのみの自分が「ぬらりひょん」という言葉に重なったというわけだ。

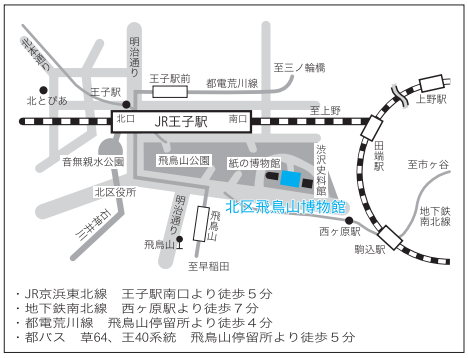
私は非常勤職員なので、ここに勤められる年限も残り1年となった。せめて最後の年は、「博物館とは何か」をしっかり意識しながら勤めたいと思っている。

(F.Nurarihyon)

利用のご案内

【開館時間】
午前10時～午後5時
(有料の展示室への入場は午後4時30分まで)

【休館日】
毎週月曜日(国民の休日・振替休日の場合は開館)
年末年始(12月28日～1月4日)
国民の休日および振替休日の翌日(土曜・日曜日の場合は開館)
このほかに臨時休館日があります。



【常設展観覧料】

	個　人	団　体	三館共通券
一　般	300円	240円	720円
小･中･高	100円	80円	240円

・小学生未満は無料
・団体扱いは20名以上
・三館共通券は当館のほか、渋沢史料館、紙の博物館をご覧になれます。

平成19年度上半期の主な催し物

春　4～6月

●春期企画展「縄文人の祈り－東谷戸遺跡の土偶－」(3/20～5/6)
●講座「快読!江戸の随筆で北区を知る」(昼4/7･4/14／夜4/4･4/11)
●講座「歩いて知る北区･春ものがたり」(4/28･5/19･6/16)
●講座「新緑の日光御成道をたどり歴史を探る」(5/12)
●スポット展示「ASUKAYAMAセレクション5☆2007」(5/18～6/23)
●講座「快読!江戸名所図会」(昼5/26･6/2･6/9　夜5/23･5/30･6/6)
●講座「初級考古学講座　ムーンライト編」(5/31･6/7･6/14･6/23)
●映像企画「都電の記憶」(6/10)

夏　7月～9月

●体験講座「年中行事<七夕>を知る講座」(7/1)
●講座「新聞から読む考古学　パート1」(7/8)
●講座「中世史入門」(7/7･7/14)
●イベント「夏休みわくわくミュージアム☆2007」(7/20～8/31)
●講座「考古遺物を調べよう」(9/8･9/15･9/22･9/29)
●特別展覧会(伝統工芸)(9/9～10/9)
●映像企画「水害の記録」(9/16)

*催し物名は仮称です。
詳しくは館発行の「催し物案内」、北区HPをごらんください。

お知らせ

□燻蒸による臨時休館

収蔵資料を害虫や黴から守る燻蒸消毒にともない、6月26日(火)から同月29日(金)までを臨時休館とする予定です。正確な日程は改めて北区ニュースなどでお知らせいたします。何卒ご理解のほどお願いいたします。

□紙の博物館･渋沢史料館の臨時休館

紙の博物館は燻蒸のため6月4日(月)から6月11日(月)まで、渋沢史料館は館内工事のため5月7日(月)から10月31日(水)まで休館いたします。その間、三館共通券は販売を中止させていただきます。

編集後記

観測史上まれにみる暖冬となった今年の冬。寒いのは嫌ですが、四季のメリハリが失われてしまうのは寂しいだけでなく、怖いような気がします。とはいえ、暖かくて助かったのが毎冬実施している小学校3･4年生向け体験学習。外でおこなう「せんたく」や「火おこし」も寒さに震えることなく楽しい体験となりました。

さて、この春で当館も開館9年目。今年は10年の節目を前に、少しずつ開花を早める桜を見ながら、これまでを見直し、これからを見据える作業をしていかなければと感じています。

北区飛鳥山博物館だより
ぼいす　18
発　行　平成19年3月20日
編　集　北区飛鳥山博物館
〒114－0002 東京都北区王子1－1－3
TEL. 03-3916-1133
発　行　東京都北区教育委員会
〒114－0022 東京都北区王子本町1－2－1
TEL. 03-3908-1111 (代)
印　刷　文明堂印刷株式会社
刊行物登録番号 18－2－038